

「五輪書」(宮本武蔵)
第一部(地の巻)

はじめに

さて、今回は、有名な『五輪書』（宮本武蔵）の考察であるが、それは、子供の頃から、映画やテレビドラマなどで、実に数多く観てきた「劍豪・宮本武蔵」の実像を知るための作業であり、そのためには、どうしても「彼」（宮本武蔵）が自ら実際に書き記したものを基にして、弟子が完成させた『五輪書』（つまり「地下水火風空之五巻」）をできるだけ丁寧かつ厳密に読み解く以外、いかなる道も残されていないのである。

とは言え、「兵法」（劍術）に関しては、まさに素人である自分にとつて、かなりの分量の、いわゆる『五輪書』をどのように読み解けばよいのか難しい問題ではあるが、しかし、結局は、一人一人、誰でも「自分なりに読み解く」ほかはなく、「兵法」（劍術）に關する専門的な「知識や技術」などは、何年も何十年も真劍に取り組んで、まさに「兵法」（劍術）というものを身を以って「体得している人たち」に任せるしかなく、それゆえ、ここでは、むしろ宮本武蔵の「心の中」をその数多くとある「項目」の原文などにできるだけ寄り添いながら、自分なりに「読み解いたもの」を書き記したものである。

例えば、宮本武蔵は、なぜ、自分の「劍法」を「二天一流」と号したのか？ また、二天一流の心は、水を本とするとは、一体、どういう意味なのか？ また、宮本武蔵の有名な「目付」とは、一体、どういうものになるのか？ また、宮本武蔵が考える「武士の定義」とは、一体、どういうものなのか？ また、心の持ち様の「平常心」とは、太刀の「持ち方」とは、「五つの構え」とは、「無念無相」の打とは、そして、宮本武蔵が到達した武芸の最究極的な「境地」とは、また、極めて難解とされる「岩尾の身」とは、「万理一空」とは、さらに、「古木鳴鶴図」や「宮本武蔵の自画像」、その他、それらすべての「謎」は解かれていますので、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見て下さい。

ちなみに、「原文」のテキストは、岩波書店出版の岩波文庫『五輪書』（渡辺一郎校注）からの「引用」となっております。

平成三十一年四月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

はじめに

① 地之巻（地の巻）

序、序文

- 一、夫兵法といふ事、……
- 一、兵法の道といふ事
- 一、兵法の道、大工にたとへたる事
- 一、兵法の道
- 一、此兵法の書、五巻に仕立つる事
- 一、此一流、二刀と名付くる事
- 一、兵法二つの字の利を知る事
- 一、兵法に武器の利を知るといふ事
- 一、兵法の拍子の事
- 一、心得「九項目」

あとがき

※ 参考文献

「五輪書」(宮本武蔵)
第一部(地の巻)

例えば、宮本武蔵の『五輪書』というのは、世界的にも非常に有名な「本」であり、それゆえ、幾つかの「外国語」にも翻訳されて、実に数多くの人たちによって読まれているかと思うが、しかし、その真の「意味内容」が正しく読まれているかどうかは、また、別の問題になって来るのだろう。——それはともかく、まず、彼自身は、いわゆる「自分の半生」を振り返って、次のように語っている。

つまり、「……我、若年のむかしより兵法の道に心をかけ、十三歳にして初而勝負をす。其あいて、新当流有馬喜兵衛といふ兵法者に打勝ち、十六歳にして但馬国秋山といふ強力な兵法者に打勝ち。廿一歳にして都へ上り、天下の兵法者にあひ、数度の勝負をけつすといへども、勝利を得ざるといふ事なし。其後国々所々に至り、諸流の兵法者に行合ひ、六十余程迄勝負すといへども、一度も其利をうしなはず。其程、年十三より廿八、九迄の事也……」とある。

これは、まさに『事実』（つまり「彼の記憶」）をそのまま書き写したということだと思ふが、彼は、子供の頃から、すでに「兵法の道」に心をかけて、そして、十三歳の時に、初めて、「立ち会った」ということである。その後、「……廿一歳にして都へ上り、天下の兵法者にあひ、数度の勝負をけつす」というのは、まさに「吉岡一門」との壮絶な戦いのことになるかと思う。そして、有名な佐々木小次郎との「巖流島の決闘」というのは、彼が二十九歳の時とすれば、それまでにすでに「六十余程迄」、まさに「真剣勝負」を行なっていて、しかも「一度も負けたことがなかった」と記してある。それでは、なぜ、自分は、一度も負けなかったのか？ それについては、次のように語っている。

つまり、「……我、三十を越へて跡をおもひみるに、兵法至極して勝つにはあらず。をのづから道の器用有りて、天理を離れざる故か。又は他流の兵法、不足なる所にや……」とある。つまり、「兵法至極して勝つ」とは、すなわち、「兵法を極めていたから勝った」のではなく、それは、「をのづから道の器用あり」て、つまり、「道の器用」とは、「剣術の器用」であり、それは、太刀（刀）を巧みに使いこなす実践（体得）の器用であつて、「兵法」（知識）などをいくら極めたところで、実際に人を斬ることはできないのである。それは、自然と「天理」（つまり「自然の道理」）に適った「刀の使い方」や「身の動き」などをしてきたからか？ それとも、「他流の兵法、不足なる所にや」、つまり、戦った相手の兵法（剣術）が、たまたま「力不足」（弱かった）からなのか？ もちろん、そういうことではないのだ、と、むしろ、はっきりと言いたいくらいだったに違いない。

そして、「……其後なをもふかき道理を得んと、朝鍛夕錬してみれば、をのづから兵法の道にあふ事、我五十歳の此也。其より似来は、尋ね入るべき道なくして、光陰を送る。兵法の利にまかせて、諸芸、諸能の道となせば、万事におゐて、我に師匠なし。今此書を作るといへども、仏法、儒道の古語をもちからず、軍記・軍法の古きことをもちひず、此一流の見たて、実の心を頭はす事、天道と観世音を鏡として、十月十日の夜寅の一てん（午前四時頃）に、筆をとつて書初むるもの也……」とある。

これは、実に興味深い「文章」であり、それゆえ、順を追って考えてみたいと思ふ。まず、「……其後なをもふかき道理を得んと、朝鍛夕錬してみる」とある。これは、一体、何を意味しているのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、宮本武蔵自身、

まだ「自分には学ぶべきものがある」と感じていたということである。それをもっと分かりやすく言えば、自分は、まだ「山の頂上」へは真に到達していないという自覚であり、それゆえ、「まだ先がある」という「思い」(感じ)である。ところが、二十年后、彼は、「……をのづから兵法の道にあふ事、我五十歳の此也……」とある。つまり、「兵法の道にあふ事」とは、すなわち、まさに「兵法の奥義(神髓)を体得(会得)した」ということである。これは、実に驚くべき「言葉」であり、なぜなら、例えば、「少年老い易く、学成り難し」という有名な言葉があるが、宮本武蔵自身、その「学が成った」と言っているのであり、終に「山の頂上」へと、うそ偽りなく、真に到達したと言っているのである。——例えば、学問で言えば、若い時からの凄まじいまでの「知識欲」が何十年と続いていたが、それが、突然、まさに「ばたっと止まってしまい、もう学ぶべきなものもなくなってしまう」ということである。それと全く同じように、つまり、宮本武蔵自身、若い時からの凄まじいまでの「武芸の修行」を何十年と続けてきたが、それが、突然、まさに「ばたっと止まってしまい、もう学ぶべきものが何もなくなくなってしまった」ということである。その「絶対的証拠」となるものが、まさに「……其より似来は、尋ね入るべき道なくして、光陰を送る」という、この「言葉」になるということである。

そして、本来ならば、他人に自分の「武芸(剣術)」を教えるという道が残されているかと思うが、(もちろん、宮本武蔵自身、そういうこともそれなりに行なってきたかも知れないが)、それとともに、「……兵法の利にまかせて、諸芸、諸能の道となせば、万事におゐて、我に師匠なし」という言葉へと連なっていくのである。つまり、宮本武蔵自身は、若い時からの、まさに凄まじいまでの「武芸探究」一筋に生きてきた人であったが、五十歳の頃、まさに「兵法の奥義(神髓)を体得(会得)する」ことによって、今まで何十年と続いたその「武芸探究欲」が、まさにばたっと止まってしまい、それに代わって、一方では、他人に「武芸(剣術)」を教えるという道と、もう一方では、その何十年と続いた「武芸探究欲」(武芸全般の探究欲)に代わって、いわば「小芸」(つまり「連歌、茶、書画、細工(彫刻)」、その他)などを積極的に行なうという道も開けたということである。もちろん、それ以前から様々なことに「興味や関心」は持っていて、実際に「絵や書その他」なども行なっていただろうが、しかし、宮本武蔵自身、何よりも「武芸探究」第一の人であり、それゆえ、それを何よりも「最優先」させていたので、本格的に行なうのは、恐らく、多くは「それ」以降ということになるのだろう。

さて、「……兵法の利にまかせて、諸芸、諸能の道となせば、万事におゐて、我に師匠なし」とある。これは、非常に有名な文章(言葉)であるが、その「意味合い」は、まず、「……我、若年のむかしより兵法の道に心をかけ、十三歳にして初而勝負をす。(中略)、其後国々所々に至り、諸流の兵法者に行合ひ、六十余程迄勝負すといへども、一度も其利をうしなはず。其程、年十三より廿八、九迄の事也……」とある。つまり、宮本武蔵は、もう子供の頃から兵法の道に心をかけ、そして、「火の巻」の序の中でも、「……我が兵法においては、数度(六十余度迄)の勝負(真剣勝負)に一命をかけて打合い、そして、「生死二つの利をわけ」(これは「何が生死を分かつ利か)を実践で学び、また、「刀の道」(それは「太刀の道筋」)をも(実践で)覚え、また、敵の打つ太刀の「強弱」をも(実践で)知り、また、刀の「刃棟の道」(それは「刃棟の使用法」)をも(実践で)わきまえ、そして、敵を打果すための鍛錬を(日々)徹底的に行なってきた」のである。そ

のように、わが兵法（武芸）の利（勝ち）にまかせて、「武芸全般」（例えば「剣術をはじめ、弓、槍、長刀、その他）などを実践で習得（体得）してきたのであり、それは、誰々に師事して教わったとか何々道場で剣術を習ったというようなことではなく、すべて数多くの「実践の戦い」の中で直接わが身を以て勝利を習得（体得）して来たのであり、また、様々な「学問」や「小芸」（例えば「連歌、茶、書画、細工（彫刻）、その他）」などをも含めて、まさに「……万事におおて、我に師匠なし」ということになるのである。

それは、「小倉碑文」の中にも、「……旃（剣術）に加へて、六芸（それは「礼（礼法）・楽（音楽）・射（弓術）・御（馬術）・書（書道）・数（算術）・文（詩文）」などに通ぜざる無し。況や小芸巧業をや。殆ど為して為さざる無き者か」（ほとんど何でもこなした）とある。つまり、宮本武蔵という人は、まさに「文武二道」に優れていたとともに、それに加えて、「小芸」（連歌、茶、書画、細工（彫刻）、その他）なども行なっていたということである。そして、今、書いている「この書物」（『五輪書』）にしても、まさに如何なる「書物」（「他人の考えややり方」などには頼らず、自分の「此一流（わが兵法）の見たて」のみによって、「実の心を顕はす事」、つまり、「自分が心の底からそう思っていることを、うそ偽りなく、そのまま書き記す」ということである。「……時に寛永二十年（一六四三年）十月上旬の此、九州肥後の地岩戸山に上り、天を拝し、観音を礼し、仏前にむかひ、生国播磨の武士新免武蔵守藤原の玄信、年つもつて六十」とある。つまり、年積もつて六十歳の時であったということである。

*

*

地の巻
ちのまき

はじめに

宮本武蔵という人は、行くところまで行った人であり、それは、まさに「兵法（剣術）の神髓を真に体得（会得）した人」であり、それゆえ、その真に体得した「兵法（剣術）の神髓」を、まさに『五輪書』（つまり「地水火風空之五巻」）の中に書き顕したということである。それでは、それらの「五巻」について、順を追って考察してみたいと思う。

一、夫兵法といふ事 それはいほう

まず、最初の本文は、「……夫兵法といふ事、武家の法なり。将たるものは、とりわけ此法をおこなひ、卒たるものも、此道を知るべき事也。今世の中に、兵法の道髓にわきまへたるといふ武士なし。先づ、道を頭はして有るは、仏法として人をたすくる道、又儒道として文の道を糾し、医者といひて諸病を治する道、或は歌道者として和歌の道をおしへ、或は数寄者・弓法者、其外諸芸・諸能までも、思ひくく稽古し、心くくにすくもの也。兵法の道にはすく人まれ也。先づ、武士は文武二道といひて、二つの道を嗜む事、是道也。縦ひ此道ぶきようなりとも、武士たるものは、おのれくが分際程は、兵の法をばつとむべき事なり。大形武士の思ふ心をはかるに、武士は只死ぬるといふ道を嗜む事と覚ゆるほどの儀也。死する道におゐては、武士斗にかぎらず、出家にても、女にても、百姓已下に至る迄、義理をしり、恥をおもひ、死する所を思ひきる事は、其差別なきもの也。武士の兵法をおこなふ道は、何事におゐても人にすぐるゝ所を本とし、或は一身の切合にかち、或は数人の戦に勝ち、主君の為、我身の為、名をあげ身をたてんと思ふ。是、兵法の徳をもつてなり。又世の中に、兵法の道をならひても、実の時の役にはたつまじきとおもふ心あるべし。其儀におゐては、何時にても、役にたつやうに稽古し、万事に至り、役にたつやうにおしゆる事、是兵法の実の道也」とある。（原文）

*

*

まず、言葉の問題であるが、「……夫兵法といふ事、武家の法なり」とある。この「法」というのは、いわば「当然そうすべき決まり事」であり、例えば、「武家」（武家の子）として生まれたならば、当然のことながら、兵法は、「……日々それ頭で学び、日々鍛練して体で覚える（体得すべき）もの」である。また、「将」とは、「隊を指揮する者」（つまり「武将」）であるが、将たるものは、とりわけ此法を積極的に身を以て習得をし、また、「卒」とは、「士卒」（つまり「兵卒」）であり、卒たるものも、此道を知るべき事（つまり「しつかり学んで知っておくべきこと」）である。そして、今の世の中に、兵法の道髓にわきまへたる（つまり「真に体得している」）という武士など、一人もない。まず、道として有るのは、例えば、「……仏法は、人を助ける道、儒道は、文（学芸）の道をつただし、医者、諸病を治す道、歌道者は、和歌の道を教え、また、数寄者（茶人）、弓法者、その他の『諸芸・諸能』までも、思ひ思ひに稽古し、心々に好く（好む）もの也。兵法の道には好く（好む）ものまれ也」とある。これは、一体、どういう「意味合い」を含むものかと問えば、それは、次のようなことである。

例えば、学校の勉強などでも、いやいや、或いは仕方なく勉強しているような「精神状態」では、いくら「勉強」したところで、その「勉強」は、少しも身につかないものである。何よりも大事なことは、まさに「好くこと」(つまり「好きになる」)ことであり、そして、勉強が好きになって、初めて、勉強が面白い、楽しい、そして、学ぶことの「喜び」や、また、上達することの「喜び」などを知ることになるのである。

それは、「兵法」(武芸)、その他、すべてのことにおいて同じことであり、いやいや、或いは仕方なく「学んでいる」ような「精神状態」では、いくら「学んだ」ところで、その「学んでいる」ことは、少しも身につかないものである。何よりも大事なことは、まさに「好くこと」(つまり「好きになる」)ことであり、そして、それを「学ぶこと」が好きになって、初めて、それを「学ぶこと」が面白い、楽しい、そして、学ぶことの「喜び」や、上達することの「喜び」を真に知ることになるのである。そして、そのようなことを長年積み重ねることによって、初めて、真の「上達者」となっていくのである。

*

*

さて、冒頭の「本文」(文章)には、当時の人たちの「考え方」がはっきりと見て取れるかと思うが、それは、まず、「……今世の中に、兵法の道慥にわきまへたるといふ武士なし」とある。そして、「……大形武士の思ふ心をはかるに、武士は只死ぬるといふ道を嗜む事と覚ゆるほどの儀也」ともある。——つまり、今の世の中に、兵法の道確かにわきまえる(つまり「真に体得している」)武士など、一人もいない。そして、大方の武士の「心根」を推し量るに、ただ「武士は死ぬことを心得る程度のこと」しか考えていないと、宮本武蔵は、不満を語っているのである。そして、ただ「死ぬ覚悟」だけならば、出家にても、女にても、百姓已下に至る迄、義理をしり、恥をおもひ、死する所を思ひきる事に、その「差別」(違い)などないと言っている。それでは、武士とは何か、と問えば、それは、まず、「……武士は文武二道といひて、二つの道を嗜む事、是道也」とある。つまり、武士は、文武両方ともしっかり学び、それを確かに身につけることこそ、何より大事なことであり、たとえ「不器用」(苦手)だとしても、自分の「分際程」(つまり「自分の身分位程度」)は、武士たるものは、しっかりと身につける努力はすべきである。そして、武士は、何事においても、人よりすぐれ(勝つて)いることを本(根本)として、「……時には一身の切合にかち、時には数人の戦に勝ち、主君の為、我身の為、名をあげ身をたてんと思ふ」こと。そういうことができ得るのも、まさに「兵法を心得ている」からであり、それが、まさに兵法の「徳」(つまり「兵法がもたらす恩恵」)でもあるのである。

そして、もう一つは、「……世の中に、兵法の道をならひても、実の時の役にはたつまじきとおもふ心あるべし」とある。これは、例えば、「……学校の勉強などいくら学んだところで、現実の社会(世の中)では何の役にも立たないじゃないか」というのに近いものがあり、それは、いわゆる「戦国乱世」のような時代であれば、誰でも、何よりも最優先させて「兵法」(武芸)を真剣に学ぼうとするものであるが、一方、天下太平の「世の中」へと推移していくなかで、「兵法の道」(つまり「武芸」など)をいくら真剣に学んでみたところで、この天下太平の「世の中」で実際にどれだけ役に立つというのだという気持ちであり、そういう気持ちから、いわゆる「兵法」(武芸)というものを真剣に学ぼうとする人たちも、次第に少なくなってしまうことである。

例えば、本文の中の「……兵法の道にはすく人まれ也」とあるが、それは、若しも「戦

国乱世」のような世の中であれば、誰でも真っ先に「兵法を好く（好む）人」（つまり真剣に学ぼうとする人）も多くなるだろうが、しかし、今のような「天下太平」の世の中では、いわゆる「兵法を好く（好む）人」（つまり本気で学ぼうとする人）などは、まれになつてしまうということである。ところが、宮本武蔵は、そうではなく、たとえ「天下太平」の世の中になつても、それは、「……何時にても、役にたつやうに稽古し、万事に至り、役にたつやうにおしゆる事、是兵法の實の道也」とある。——つまり、世の中がどのように「変化・変貌」しようとも、そういうことにはあまりとらわれず、「兵法」（武芸）というものを、真に「生かす道」はいくらでもあるのであり、そのように役に立つやうに稽古をし、また、役に立つやうに人に教えるということこそ、まさに「兵法の實の道」であると、宮本武蔵は、そう強調しているのである。

一、兵法の道といふ事

次は、「兵法の道といふ事」という項目であるが、それは、「……漢土・和朝までも、此道をおこなふ者を、兵法の達者といひ伝へたり。武士として此法を学ばずといふ事あるべからず。近代、兵法者といひて世を渡るもの、是は剣術一通の事也。常陸国鹿島・香取の社人共、明神の伝へとして流々をたて、国々を廻り、人につたゆる事、ちかき此の義也。古しへより、十能・七芸と有るうちに、利方といひて、芸にわたるといへども、利方と云出すより、剣術一通にかぎるべからず。剣術一ぺんの利までにては、剣術もしりがたし。勿論、兵の法には叶ふべからず。

世の中をみるに、諸芸をうり物にしたて、我身をうり物のやうに思ひ、諸道具につけても、うり物にこしらゆる心、花実の二つにして、花よりもみのすくなき所なり。とりわき此兵法の道に、色をかざり、花をさかせて、術とてらひ、或は一道場、或は二道場などいひて、此道をおしへ、此道を習ひて、利を得んとおもふ事、誰かいふ、『なま兵法大疵のもと』、まことなるべし」とある。（「原文」前半部分）

まず、漢土（中国）和朝（日本）までも、此道（兵法の道）を真に習得し、行なう人たちを、いわゆる「兵法の達者」（いわば「兵法の達人」と云い伝えて来た。そして、武士として、この「法」（兵法）を学ばないということはあつてはならないことである。

最近、兵法者と（自ら）称して「世を渡る」もの、それは、「剣術一通」（真の兵法者、などではなく、それは剣術だけの人）である。例えば、常陸国（茨城県）の「鹿島・香取の社人共」（それは「鹿島神社や香取神社の神人たち」）が、まさに「明神」（神）からの「伝え」（いわば「直伝」）だと称して、様々な「流派」を立てて、国々（諸国）を巡つて、（例えば、塚原卜伝、その他）、人に「剣術」などを教え伝えるようになったのは、それは、まだ最近のことである。そして、昔から、「十能・七芸」と実に「様々な武芸」がある中でも、剣術は、まさに「利方」（有益・役に立つ）と言つて、（例えば、塚原卜伝のように）、まさに（剣術）の「芸」で世渡りをしているが、（ほんとうに）「利方」（有益・役に立つ）と言うのであれば、「剣術一通」（剣術だけを学び、ほかの武芸は学ばない）などと限るべきではなく、なぜなら、「剣術一辺倒」（それは「剣術だけ」）を学んで得られる「利」（利点）だけでは、（そもそも）「剣術」の何たるかも知りがたく、まして

や真の「兵法」に叶うはずもないからである。——つまり、「剣術」だけではなく、他の「武芸」(例えば、弓、槍、馬術、長刀、その他)なども真に「習得」(身を以て学ぶ)ことよつてこそ、初めて「剣術」の何たるかもはつきりと分かるようになると共に、まさに真の「兵法」(或いは「兵法者」)とも呼べるものになるのである。

* *
つまり、宮本武蔵がここで特に言いたいことは、次のようなことである。例えば、野球の「監督」であれば、それこそ野球全般に渡つて、実に事細かな実に細部の所まですべて熟知していなければならず、また、大工の「統領」であれば、それこれ建築全般に渡つて、実に事細かな実に細部の所まですべて熟知していなければならぬ。そして、その野球の「監督」が持ち合わせている、その「総合的専門知識や技術」と、一選手が持ち合わせている、その「部分的専門知識や技術」とでは、全く違うものであり、また、建築の「統領」が持ち合わせている、その「総合的専門知識や技術」と、一大工が持ち合わせている、その「部分的専門知識や技術」とでは、全く違うものである。そして、野球の「監督」や建築の「統領」などが持ち合わせている、その「総合的専門知識や技術」こそは、まさに真の「兵法」の「智慧」とも言えるものであり、一方、一選手や一大工が持ち合わせている、その「部分的専門知識や技術」だけでは、真の「兵法」の「智慧」などとは、とても言えないものである。だからこそ、宮本武蔵は、「剣術」だけの専門的な「知識や技術」などを持ち合わせているだけで、自ら「兵法者」などと名乗っているのは、明らかにおかしいと言っているのである。

* *
そして、世の中を見てみると、諸芸を売り物に仕立てて、我が身も売り物のように思いなして、この世の様々な「道具」などについても、(実用より)、売り物にしらえる心、まさに「花実」(花は、見た目の華やかさ、実は、内実の優れていることであるが)、この「花実二つ」を見るに、「花」(見た目の華やかさ)に比べれば、「実」(内実の優れているもの)は、少ないのである。とりわけ、この「兵法の道」において、「色」を飾り、「花」(見た目の華やかさ)を咲かせ、「術」(剣術)などと尤もらしく誇つてひけらかし、例えば、一道場、二道場などと言つて、「この道」(兵法の道)を教え、「この道」(兵法の道)を習つては、この道の「利」(有益・有利)を得ようと思うこと、誰か言う、「なま兵法は、大怪我の元」であると。それは、まさに「誠」(真実)のことである。

* *
さて、これは、一体、どういうことかと問えば、それは、例えば、「戦国乱世」のような世の中であれば、当然のことながら、その「兵法」(武芸) というものは、まさに「実践向けの実際に役立つ兵法(武芸)」となるものであるが、しかし、今のような「天下太平の世の中」においては、むしろ「見た目の華やかな、パフォーマンスに富んだ兵法(武芸)」の方が、むしろ「人気を得て、主流となつていく」のである。そして、その華やかな「兵法」(武芸)を以て、まさに「金儲けの手段」として最大限利用しようとするものである。それは、いつの世でも、また、どのような分野においても、同じような傾向は見取れるものであり、例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、その他、どのような分野であれ、その「花実二つ」を見るに、「花」(見た目の華やかさ)に比べれば、「実」(内実の真に優れているもの)は、少ないのである。

次に、後半の「本文」であるが、それは、「……凡そ人の世を渡る事、士農工商とて四つの道也。一つには農の道。農人は色々の農具をまうけ、四季転変の心得いとまなくして、春秋を送る事、是農の道也。二つにはあきないの道。酒を作るものは、それぐの道具をもとめ、其善悪の利を得て、とせいをおくる。いづれもあきないの道、其身ぐのかせぎ、其利をもつて世をわたる也。是商の道。三つには士の道。武士におみては、道さまぐの兵具をこしらゑ、兵具しなぐの徳をわきまへたらんこそ、武士の道なるべけれ。兵具をもたしなまず、其具々々の利をも覚えざる事、武家は少々たしなみのあさき物か。四つには工の道。大工の道におみては、種々様々の道具をたくみこしらへ、其具々々を能くつかい覚え、すみがねをもつてそのさしづをたゞし、いとまもなくそのわざをして世を渡る。是士農工商、四つの道也。兵法を大工の道にたとへていひあらはず也。大工にたとゆる事、家といふ事につけての義也。公家・武家・四家、其家のやぶれ、家のつゞくといふ事、其流・其風・其家などといへば、家といふより、大工の道にたとへたり。大工は大きにたくむと書くなれば、兵法の道、大きなるたくみによつて、大工にいひなぞらへて書頭はず也。兵の法をまなばんとおもはゞ、此書を思案して、師は針、弟子は糸となつて、たへず稽古有るべき事也」とある。(「原文」後半部分)

まず、宮本武蔵は、世の中の「全体を見る眼」として、いわゆる「士農工商」という社会制度を取り上げて、その「士農工商」の「特徴や様子」などについて語っている部分であるが、その「内容」というのは、次のようなものである。

およそ、「人の世を渡る」(つまり生きていく上)に、まさに「士農工商」として「四つの道」がある。その一つは、「農の道」であり、農人(農民)は、色々な「農具」を設ける(準備・用意)して、まさに「四季転変」(四季折々の様々な気候気温の変化)などに柔軟に対応して行く「心得」に「いとま」(ひま)などなく、そのようにして「春秋」(春夏秋冬の一年)を忙しく送ることになるのが、まさに「農の道」である。

二つには、「商いの道」がある。それは、例えば、酒を作る人は、(その酒造りにより適した)それぞれの「道具」を求めて、(よりよき酒を造り)、そして、その(商品)の「善悪」の「利」(例えば、品が良いという「利」《有利》を以て、その「利」《利益》を上げること)を得て、渡世(世の中)を渡るのである。つまり、どのような「商いの道」でも、商人それぞれの「稼ぎ」というのは、まさにその「利」(有利の「利」と利益の「利」とを得て、まさに世の中を渡るのである。これが「商の道」(つまり「商いの道」)である。

三つには、「士の道」がある。武士においては、「道さまぐの兵具」(つまり「用途に応じた様々な兵具」)などを作り出し、そして、その「それぞれの兵具」が持つ「徳」(長所・短所)などをよくわかまえることこそ、武士の道であるべきである。が、その「兵具」を「たしなむ」(「好んでなれ親しもう」ともせず、それゆえ、その一つ一つの武器の「利」(利点・欠点)などもよく知らないような状態であるが、武家は、兵具を「たしなむ」(「好んでなれ親しもう」という気持ちだが、少し「浅い」(足りない)のではないか。

四つには、「工の道」がある。例えば、大工の道において、種々様々の「道具」を巧みに作り出し、そのそれぞれの「道具」を上手く使いこなしては、いわゆる「すみがね」(「規矩術」など)を以て、その「さしづ」(設計図)の内容などを糺し、休むひまなく、その「業」

(仕事)をこなして、世を渡るのである。これが「士農工商」、四つの道である。

さて、「兵法」を「大工の道」にたとえて表してみたが、大工にたとえたのは、家といふことに関連させることである。例えば、公家・武家・四家、その家の「やぶれ」(お家断絶)とか、家の「つゞく」(お家存続)とか、また、何々流・何々家・何々家などと、いろいろな言い方があるので、ここでは、「家」ということから、まさに「大工の道」にたとえてみたのである。大工という文字は、まさに「大きに工む」となるので、「大きなたくみ」という「意味合い」で、大工にいいなぞらえて書き顕すのである。そして、「兵法」(「兵法・武芸」)などを本気で学ぼうと思うならば、この書をよく読み、よく思索し、「……師は針、弟子は糸となつて、たへず稽古有るべき事也」とある。

*

*

さて、最後の「……師は針、弟子は糸となつて、たへず稽古有るべき事也」というのは、一体、どういう「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。まず、「針」というのは、最初、(まるで見本を示すように)、必ず、「生地」の上(下)をなめらかに縫い進んで行くものである。一方、「糸」というのは、その縫い進んでいく「針」の後を、まるでそのままそっくりなぞるように、或いは、まるでそのままそっくりまねるように、全く同じように縫い進んで行くことになる。——つまり、若しも「針」が「師」であるならば、「糸」の弟子というのは、その「師」の後(やり方)をまるでそのままそっくりなぞるように、或いは、まるでそのままそっくりまねるように、全く同じように後を追っていくことになるのである。そのように「糸」(弟子)は、「針」(師)の後(やり方)をまるでそのままそっくりなぞるように、或いは、まるでそのままそっくりまねるように、全く同じように後を追っていく。そのように絶えず稽古あるべきということである。例えば、外国語の勉強をする時には、必ず、生徒は先生の後(やり方)をまるでそのままそっくりなぞるように、或いは、まるでそのままそっくりまねるように、全く同じようにして後を追っていくものである。それは、ありとあらゆるスポーツの「基礎」を学ぶような時をはじめ、音楽の「楽器」などを習い始めるような時にも、また、料理や大工の見習い、様々な芸事の学習、冠婚葬祭などの礼儀作法、或いは、各分野の仕事の仕方、そして、車の運転、その他、最初は、すべてそのようにして学習していくものである。

一、兵法の道、大工にたとへたる事

次は、「兵法の道、大工にたとへたる事」という項目であるが、それは、次のようなものである。「……大將は大工の統領として、天下のかねをわきまへ、其国のかねを糺し、其家のかねを知る事、統領の道也。大工の統領は堂塔伽藍のすみがねを覚え、宮殿楼閣のさしづを知り、人々をつかひ、家々を取立つる事、大工の統領も武家の統領も同じ事也。家を立つるに木くばりをする事、直にして節もなく、見つきのよきをおもての柱とし、少しふしありても、直につよきをうらの柱とし、たとい少しよはくとも、ふしなき木のみざまよきをば、敷居・鴨居・戸障子と、それぐにつかひ、ふしありとも、ゆがみたりとも、つよき木をば、其家のつよみくを見わけて、よく吟味してつかふにおみては、其家久敷くづれがたし。又材木のうちにしても、ふしおほく、ゆがみてよわきをば、あししろともなし、後には薪ともなすべき也。

統領におゐて大工をつかふ事、其上中下を知り、或はとこまはり、或は戸障子、或は敷居・鴨居・天井已下、それごとくにつかひて、あしきにはねだをはらせ、猶悪しきにはくさびをけづらせ、人をみわけてつかへば、其はか行きて、手際よきもの也。果敢の行き、手ぎわよきといふ所、物毎をゆるさざる事、たいゆう知る事、気の上中下を知る事、いさみを付くるといふ事、むたいを知るといふ事、かやうの事ども、統領の心持に有る事也。兵法の利かくのごとし」とある。（「原文」）

*

*

まず、「大将」（武将）は、例えれば、大工の「統領」として、天下の「かね」（規矩・規範）をわきまへ（心得）て、その国の「かね」（規矩・規範）をたす。これは、「正しい尺度（規範）を以て誤った尺度」を糺すということであり、また、その家の「かね」を知る事。これも「家の正しい寸法（規範）」を知るということであり、これが、まさに「統領の道」である。そして、大工の「統領」というのは、堂塔伽藍の「すみがね」（正しい「尺度や規矩術」など）を覚え、また、宮殿楼閣の「さしづ」（設計図）の内容をよく理解し、人々を使つて、家々を建てること、大工の統領も武家の統領も同じことである。

さて、家を立てるには、いわゆる「木くばり」（それは「どの木材をどこに用いるか」）を決めていく。——例えば、真つ直ぐで、節もなく、見栄えの良いものは、まさに「表の柱」として用いるのである。また、少し節があつても、真つ直ぐで丈夫な木材は、いわゆる「裏の柱」として用いるのである。また、たとえ少し丈夫でなくても、節のない木材で、見た目の良いものは、例えば、敷居・鴨居・戸障子と、それぞれに用いて、また、節があつても、ゆがんでいても、丈夫な木材であれば、その家の丈夫丈夫が要求される所を見分け、よく吟味して、そこに丈夫な木材を用いれば、その家は、久しく崩れないものとなるのである。また、様々な木材のなかでも、節が多くて、ゆがんで丈夫でもない木材は、例えば、「足しろ」（足場）として用い、そのあとは、薪として用いてもよいのである。

そして、（大工の）統領として、大工の「使い方」というのは、まず、それぞれの大工としての腕の「上中下」をよく見極めて、その腕の「上中下」に合わせて、ある大工には、床の間をはらせ、また、ある大工には戸障子を、また、ある大工には、敷居・鴨居・天井以下、それぞれの腕に合わせて大工を使い、そして、腕の悪い大工には「ねだ」（床下の横木）をはらせ、なお「悪い大工」には、くさびを削らせる。そのように人をよく見分けて、人を使うようにすれば、仕事は、はかがいって、手際よいものとなるのである。

それは、大工の統領であれ（武家の統領であれ）、大事なことは、まず、それぞれの大工（士卒）の能力の「上中下」をよく見極めて、その能力の「上中下」に合わせて、まさに「適材適所」で用いるようにすること。そうすれば、仕事は、果敢が行き、手ぎわ良いものになる。また、何事も手抜きを許さないこと。各人の「体用」（「心技体」の体）を知る事。また、各人の「気」（「心技体」の心）の「上中下」をよく見極める事。人々にやる気を起こさせる事。そして、無理（限度）を知り、敢えて「むたい」（無理）をさせない事。これらが大工の「統領」の心得るべきことであるが、それは、いわゆる「兵法の利（理）」も、（基本的には）これと全く同じことである。

次は、「兵法の道」という項目であるが、それは、「……士卒たるものは大工にして、手づから其道具をとき、色々のせめ道具をこしらへ、大工の箱に入れて持ち、統領云付くる所をうけ、柱・虹梁をも手斧にてけづり、とこ・たなをもかんなにてけづり、すかし物、ほり物をもして、よくかねを糺し、すみぐめんどう迄も手ぎわ能くしたつる所、大工の法也。大工のわざ、手にかけて能くしおぼへ、すみがねをよくしければ、後は統領となる物也。大工のたしなみ、よくきるゝ道具を持ち、透々にとぐ事肝要也。其道具をとつて、みづし・書棚・机卓、又はあんどん・まないた・鍋のふた迄も達者にする所、大工の専也。士卒たるもの、このごとく也。能々吟味有るべし。大工のたしなみ、ひずまざる事、とめをあはする事、かんなにて能くけづる事、すみがかざる事、後にひすかざる事、肝要なり。此道をまなばんとおもはず、書頭はす所のことぐに心を入れて、よく吟味有るべきもの也」とある。(原文)

* *
まず、士卒(兵卒)たるものは、いわば「大工」であり、自らその道具を研ぎ、色々のせめ道具(工夫もの)をこしらえ、それらを「大工の箱」に入れて持ち、統領の言いつけるところを受けて、柱・梁などは、それを手斧にて削り、また、床・棚などは、かんなにて削り、透かしもの、堀りものなども行なつて、よく「かね」(曲尺で寸法)を糺し、隅々まで面倒な所まで手際よく仕上げるのが、まさに「大工の法」(やり方)である。

大工の「業」というのは、自らの手で実際にやってみて、それを実地でし覚えるものである。「すみがね」(「規矩術」等)を真に体得できれば、やがては「統領」となれるものである。大工の「たしなみ」(日頃から心がけること)は、よく切れる道具を持ち、透々にその道具を研ぐことが肝要(大事なこと)である。その(磨いた)道具を手にとって、例えば、取っ手、御厨子、書棚、机・卓、又は、あんどん、まな板、鍋のふた迄も上手に仕上げるのが、まさに「大工の専」(つまり「大工として最も大事なこと」)である。

士卒(兵卒)たるものも、全く同じことであり、よくよく「吟味」(熟慮)あるべきである。そして、大工の「たしなみ」(日頃から心がけること)は、例えば、一つは、「ひずまざる」(ゆがまない)こと。一つは、「とめ」(接合)をびたりと合せること。一つは、かんなにて能く(上手く)削ること。一つは、「すり(み)かかざる」(すり傷をつけない)こと。一つは、後で「ひすかざる」(そつて隙間ができない)こと。これらが「肝要」(大事)なことである。そして、「この道」(「兵法・武芸」)を本気で学ぼうと思ふならば、「ここに書き頭したことごとくに、「心を入れて」(それこれ本気になって真剣に)、まさに「よく吟味」(その真意を深く読み解く)ように努力すべきことである。

一、此兵法の書、五卷に仕立つる事

次は、「此兵法の書、五卷に仕立つる事」という項目であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……五つの道をわから、一まき／＼にして其利をしらしめんが為に、地水火風空として五卷に書頭はすなり。地の巻におゐては、兵法の道の大躰、我一流の見立、剣術一通にしては、まことの道を得がたし。大きな所よりちいさき所を知り、浅きより深きに至る。直なる道の地形を引きならすによつて、初を地の巻と名付くる也。第二、水の巻。水を本として、心を水になる也。水は方円のうつわものに随ひ、一てき

となり、さうかいとなる。水に碧潭の色あり、きよき所をもちひて、一流のことを此巻に書頭はす也。劍術一通の理、さだかに見わけ、一人の敵に自由に勝つ時は、世界の人に皆勝つ所也。人に勝つといふ心は千万の敵にも同意なり。將たるものの兵法、ちいさを大きになす事、尺のかたをもつて大仏をたつるに同じ。か様の義、こまやかに書分けがたし。一をもつて万と知る事、兵法の利也。一流の事、此水の巻に書するす也。第二、火の巻。此まきに戦ひの事を書記す也。火は大小となり、けやけき心なるによつて、合戦の事を書く也。合戦の道、一人と一人との戦ひも、万と万とのたゞかいも同じ道なり。心を大きな事になし、心をちいさくにして、よく吟味して見るべし。大きな所は見えずし、ちいさき所は見えがたし。其子細、大人数の事は即座にも通りがたし。一人の事は心一つにてかわる事はやきによつて、ちいさき所しる事得がたし。能く吟味有るべし。此火の巻の事、はやき間の事なるによつて、日々に手馴れ、常のごとくおもひ、心のかはらぬ所、兵法の肝要也。然るによつて、戦勝負の所を火の巻に書頭はす也。第四、風の巻。此巻を風の巻とする事、我一流の事にはあらず、世中の兵法、其流々の事を書載する所也。風といふにおゐては、むかしの風、今の風、その家々の風などとあれば、世間の兵法、其流々のしわざを、さだかに書頭はす、是風也。他の事をよく知らずしては、自らのわきまへ成りがたし。道々事々をおこなふに、外道といふ心あり。日々に其道を勤むるといふとも、心のそむけば、其身はよき道とおもふとも、直なる所より見れば、実の道にはあらず。実の道を極めざれば、少し心のゆがみに付けて、後には大きにゆがむもの也。吟味すべし。他の兵法、劍術ばかりと世に思ふ事、尤也。我兵法の利わざにおゐても、各別の義也。世間の兵法をしらしめんために、風の巻として、他流の事を書頭はす也。第五、空の巻。此巻空と書頭はす事、空と云出すよりしては、何をか奥といひ、何をか口といはん。道理を得ては道理をはなれ、兵法の道に、おのれと自由ありて、おのれと奇特を得、時にあひては拍子を知り、おのづから打ち、おのづからあたる。是みな空の道也。おのれと実の道に入る事を、空の巻にして書きとゞむるもの也」とある。(原文)

さて、兵法を「五つの道」に分けて、それを「二巻一卷」にして、その「利」(理)をよく知ってもらうために、まさに「地水火風空」として五巻に書き頭わすものである。

まず、「地の巻」においては、兵法の道の大筋(概略)を、また、我一流(それは宮本武蔵の「二天一流の兵法」)の「見立て」を述べているが、例えば、「劍術」だけを行なっていたのでは、誠の「道」(真の「兵法」)というものは、真に「体得」し難いものである。他の「武芸」(例えば、弓、槍、馬術、長刀、その他)なども真に「習得」(身を以て学ぶこと)によつてこそ、——大きな所から小さな所を知り、浅いところから深いところに至る。それは、真つ直ぐで正しい(兵法の)「道」(真の「兵法」)の「地形」(地均しをして固める)という意味合いで、最初の一巻を「地の巻」と名づけるのである。

第二に、水の巻。水を本として、心は「水のようになる」ことである。水は、(自ら如何なる形をも持たず)、あらゆる「器」(状況)に応じて刻々と「形」を変えていくものである。時には、一滴となり、時には、蒼海となる。水には「碧潭の色」(それは「深く青々とした深淵の色」というものがある。その「清らかなところ」を用いて、まさに「一流のこと」(それは「二天一流の兵法・劍術」)を「此の巻」に書き頭わすものである。

また、劍術の「道理」をしっかりと真に体得して、一人の敵に自由に勝つようになれば、

世界の人にみな勝つことでもあるのである。人に勝つという心は、千人万人の敵に対しても同じことである。将（武将）たるものの「兵法」は、小さなことを大きいことに見立てることである、一尺の小さな型をもつて、大仏を建てるに同じ。（例えば、建築家は、小さな模型から、大きな建築物を建てるのである）。このようなことは、細やかに書き分けることは難しいので、一をもつて万と知ること。そのようなことができるのも、まさに「兵法の利」（兵法を学んでいるから得られる利点）である。そして、「一流の事」（それは「二天一流の兵法・剣術」については、此の「水の巻」に書き記すものである。

第三は、火の巻。此の巻に「戦いの事」を書き記すものである。というのも、火は、「大小」（時には大きくなったり、時には小さくなったりと、あわただしく際だった「状態」になるので、合戦の事を書くのである。合戦の道は、一人と一人との戦いも、万と万との戦いも同じ道（道理）なのである。心を大きな事（合戦）になし、また、心を小さく（一対一）になして、よく「吟味」して見るべきである。それは、大きな所は見えやすく、また、小さい所は見えにくいものである。その「子細」を説明すれば、例えば、大人数の時は、その人数が多いために、様々な「行動」も「即座」（すぐさま）変化するということが出来にくい。ところが、一人の時は、相手の「心」も一つなので、その人の「思った通り」に即座に変化することが出来るので、それゆえ、事細かなところまで相手の「動き」（心）を読むということは、なかなかできないことなるのである。このことは、よく「吟味」（熟考）あるべきである。此の「火の巻」のことは、「はやき間の事」（素早い間のこと）になるので、日々に（鍛練して）手馴れ、また、常に（実践のごとく）思つて、変わることなく、持続した心を持ち続けることが、何よりも「兵法の肝要」（大事）なのである。然るによつて、戦い勝負のことを、此の「火の巻」に書き頭わすものである。

第四は、風の巻。此の巻を「風の巻」として書き記すことは、「我一流」（わが「二天一流の兵法・剣術」のことではない。世の中の「兵法」（その様々な「流派」のことを書き記すものである。なぜ、「風」というのかと言えば、それは、例えば、昔の「風」とか、今の「風」とか、また、その家々の「風」などとあるように、世間の「兵法」（その様々な「流派」の「仕業」（剣術の仕方）を、定かに（はつきりと）書き頭わしたものが、まさに「風の巻」である。ほかの「流派」のことをよく知らないのでは、自分の「兵法（剣術）」をよく熟知することもなりたい。世の中の様々な「道々事々」を学び、行なうにも、いわゆる「外道」（それは、まさに「間違つた」正しくない「道」を学ぶということ）がある。——例えば、日々、その道を一生懸命に「勤むる」（努力をしている）と言えども、心のどこかに道に「背くような思い」があれば、その身（本人）は、よき道（正しい道）を学んでいると思つても、まさに「直なる所」（つまり「真つ直ぐで正しい道」）から見れば、実の道（真の「兵法・剣術」）ではないのである。実の道（真の「兵法・剣術」）を日々、鍛練して極めるのでなければ、たとえ最初は「少しの心のゆがみ」に過ぎなくても、後々には、まさに「大きなゆがみ」となってしまうものである。よくよく「吟味」あるべきことである。また、ほかの「流派」の人たちの「兵法」というのは、まさに「剣術」ばかりと世間の人たちが思うこと、それは、尤もなことである。しかし、一方、わが「兵法」の「利わざ」（理と業）というのは、それらとは全く別のもの（違うもの）である。そして、「世間の兵法」（その様々な「流派」）がどういうものかをよく知つてもらふために、いわば「風の巻」として、ここに「他流」のことを書き頭わすのであ

る。

第五に、空の巻。此の巻、「空」と書き頭わすこと、そもそも「空」（何も無い）と言
い出すからには、何をか「奥」と言い、何をか「口」（入口）と言うのか？ それ自体、
おかしいことになるだろう。——何よりも大事なことは、日々の「鍛練」によって、たと
えその時その時に或る「道理」を得たとしても、さらなる鍛練によつて、それらの「道理」
を離れ、また、新たな「道理」を得るといふような、そういうことを長年に渡つて、ほん
とうに真剣に積み重ねた結果として、その人が、うそ偽りなく、真に「兵法」（武芸）
というものを真に「習得・体得」し得たならば、兵法の道には、自然と（身や心に）「自
由」（自在さ）というものが身について来るとともに、自然と「兵法・武芸」の「奇特」
（それは「真に優れた技の神髄」《神技》）をも得て、その時々合つた（極めて絶妙な）
「拍子」を以て、まさに「……おのづから打ち、おのづからあたる」という状態になるの
である。これが、まさにすべての「空の道」である。そして、自然と「実の道」（真の「兵
法・剣術」）のその「神髄世界」へと入ることを、まさに「空の巻」として、ここに書き留
めるものである。

一、此一流、二刀と名付くる事

次は、「此一流、二刀と名付くる事」という項目であるが、それは、次のようなもので
ある。つまり、「……二刀と云出す所、武士は将卒ともにどきに二刀を腰に付くる役也。
昔は太刀・刀といひ、今は刀・脇指といふ。武士たるもの此両腰を持つ事、こまかに
書頭はすに及ばず。我朝におゐて、しるもしらぬも腰におぶ事、武士の道也。此二つの利
をしらしめんために、二刀一流といふなり。鑓・長刀よりしては、外の物といひて、武
道具のうち也。一流の道、初心のものにおゐて、太刀・刀両手に持ちて道を仕習ふ事、実
の所也。一命を捨つる時は、道具を残さず役にたてたきもの也。道具を役にたてず、こし
に納めて死する事、本意に有るべからず。然れども、両手に物を持つ事、左右共に自由に
は叶ひがたし。太刀を片手にてとりならはせんため也。鑓・長刀、大道具は是非に及ばず
（鑓・長刀、大道具を両手で持つのは仕方がないが）、しかし、刀・脇指におゐては、
いづれも片手にて持つ道具也。太刀を両手にて持ちて悪しき事、馬上にてあし、かけ走
る時あし。沼・ふけ・石原、さかしき（けわしい）道、人ごみにあし。左に弓・鑓を
持ち、其外いづれの道具を持ちても、みな片手にて太刀をつかふものなれば、両手にて太
刀をかまゆる事、実の道にあらず。若し片手にて打ちころしがたき時は、両手にても打
ちとむべし。手間の入る事にもあるべからず。先づ片手にて太刀をふりならはせん為
に、二刀として、太刀を片手にて振覚ゆる道也。人毎に初而とする時は、太刀おもくて振廻しが
たき物なれども、万初めてとり付くる時は、弓もひきがたし、長刀も振りがたし。いづ
れも其道具になれては、弓も力つよくなり、太刀もふりつけぬれば、道の力を得て振
よくなる也。太刀の道といふ事、はやくふるにあらず。第二水の巻にてしるべし。太刀は
ひろき所にてふり、脇差はせばき所にてふる事、先づ道の本意也。此一流におゐて、長き
にても勝ち、短きにても勝つ。故によつて太刀の寸をさだめず、何にても勝つ事を得る
心、一流の道也。太刀一つ持ちたるよりも、二つ持ちてよき所、大勢を一人してたゝかふ
時、又とり籠りものなどの時によき事有り。かやうの儀、今委敷書頭はすに及ばず、一を

もつて方を知るべし。兵法の道おこなひ得ては、一つも見へずといふ事なし。能々吟味あるべき也」とある。(「原文」)

*

*

さて、宮本武蔵は、なぜ、自分の「剣法」を「二天一流」(或いは「二刀一流」と号したのか? それには、次のようなはっきりとした理由があるからである。つまり、武士は、やがて、必ず「二刀」を腰に帯びることになるが、昔は、それを「太刀と刀」と言い、今は、「刀と脇差」と呼ぶ。そして、まさに「この二つ(二刀)の利(勝つ理)を知らしめんため、二刀一流といふなり」とある。つまり、日本の武士は、やがて、必ず、「刀と脇差」の二刀を腰につけることになる。そして、「……一命を捨つる時」は、それは、一命を賭けて「真剣勝負」をする時には、自分の持てる「道具」(武器)のすべてを残らず役に立てたいものである。せつかく持っているその「道具」(武器)を何の役にも立てず、ただ腰に納めたままで死んで行くというようなことは、(誰にとつても)本意であるはずはない。だからこそ、この「二刀の刀」を最大限に使いこなす、或いは、自由自在に使いこなして、あらゆる事態に対応でき得る、まさに勝つための「剣法」こそは、まさに宮本武蔵の「二天一流」という「兵法」(剣術)そのものになるのである。

それでは、どうやってそれを身につけるのかと問えば、それは、「……一流の道、初心のものにおゐて、太刀・刀両手に持ちて仕習ふ事、実の所也」とある。つまり、「一流の道」とは、宮本武蔵の「兵法」(剣術)のことであるが、その宮本武蔵の「兵法」(剣術)においては、最初から、右手に「太刀」、左手に「刀」(脇差)を持って習い始めるといふのは、まさにその通りであり、それは、「……刀・わき差におゐては、いづれも片手に持つ道具也。太刀を両手に持ちて悪しき事、馬上にてあし、かけ走る時あし。沼・ふけ(湿原)・石原、さかしき(けわしい)道、人ごみにあし。左に弓・鎧を持ち、其外いづれの道具を持ちても、みな片手にて太刀をつかふものなれば、両手にて太刀をかまゆる事、実の道にあらず。若し片手にて打ちころしがたき時は、両手にても打ちとむ(打ち留める)べし。……」とある。

つまり、両手に持つてだけの「剣術の習い」などをいくら行なつても、実践ではほとんど役には立たないということである。そこで、宮本武蔵は、「……先づ片手にて太刀をふりならはせん為に、二刀として、太刀を片手にて振覚ゆる道也。人毎に初而とする時は、太刀おもくて振廻しがたき物なれども、万初めてとり付くる時は、弓もひきがたし、長刀も振りがたし。いづれも其道具になれては、弓も力強くなり、太刀もふりなれば、道の力を得て振よくなる也……」とある。つまり、なぜ、両手に「二刀」を持たせるのかと言え、それは、片手だけで「刀」を振り習わせるためであり、そして、最初は、何でも重く感じられ、なかなか思うようには振り回すことはできにくい、しかし、何度も何度も鍛錬して慣れてくれば、最終的には自分の思い通りに片手だけで「刀」を自由自在に使いこなせるようになるものである。それは、右手一本だけで「刀」を自由自在に使いこなせるようになる。また、左手一本だけでも「刀」を自由自在に使いこなせるようになる。

(これは、右手を負傷した時などにも有効)、そして、両手を使って「刀と脇差」とを自由自在に使いこなせるようになる。——つまり、「二刀の刀」を最大限に使いこなす、或いは、自由自在に使いこなして、あらゆる事態に対応でき得る、まさに勝つための「剣法」こそは、まさに宮本武蔵の「二天一流」という「兵法」そのものであり、そのためには、

当然のことながら、何よりも「肉体の鍛錬」なども日頃から徹底的にやり続けなければならないことは、敢えて言うまでもない。

そして、宮本武蔵の「剣法」では、「……長きにても勝ち、短きにても勝つ。故によつて太刀の寸をさだめず、何にても勝つ事を得る心、一流の道也」とある。これは、極めて大事な言葉であり、——つまり、刀の「長さ」だけで「勝敗は決まる」ものではない。長くても、短くても、たとえいかなる「尺の刀」を使つてでも、常に勝とうとする自分自身の「剣術」そのものを磨き上げておくことが、何よりも大事だと言っているのである。また、太刀（刀）の道というのは、太刀（刀）をただ速く振るようなことではない。このことは、第二の「水の巻」のなかでも知ることになるだろう。そして、「……太刀はひろき所にてふり、脇差はせまき所にてふる事」は、剣術の基本で当然のことである。

また、二刀流は、「……太刀一つ持ちたるよりも、二つ持ちてよき所、大勢を一人してたゝかふ時、又とり籠りものなどの時によき事あり」とある。つまり、大勢と一人で戦う時には、むしろ二刀流の方がよい場合もあれば、また、「とり籠りもの」というのは、（屋内などの狭い場所に）立て籠っている場合であるが、その立て籠っている相手（敵）と戦うような時には、むしろ「二刀流」の方がよい場合もある。このようなことは、今、詳しく書き願わずに及ばない。一をもつて万を知るべきである。兵法の道を習得し得ては、一つとして見えないと言うことはないのである。よくよく「吟味」あるべきことである。

また、ここでは述べてはいないが、いわゆる「武器の利」（長所・短所）などもよく知っておくことが大事であり、それは、例えば、槍、長刀、弓、柔、棒、鎖鎌、その他、どのような「武術」に対しても、それらの「武器の利」（長所・短所）などをよく知っておくことは大事であると同時に、いかにどう戦えば相手に勝てるかの「剣術」（戦術）なども、しっかりと身に付けておかなければ、いざという時に、まさに「常に勝つ」というようなことは、なかなかでき難いことになるのである。

一、兵法二つの字の利を知る事

次は、「兵法二つの字の利を知る事」という項目であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……此道におゐて、太刀を振るたるものを、兵法者と世に云伝へたり。武芸の道に至りて、弓を能く射れば射手といひ、鉄袍を得たるものは鉄袍うちといひ、鎧をつかひ得ては鎧つかひといひ、長刀をおぼへては長刀つかひといふ。然るにおゐては、太刀の道を覚へたるものを太刀つかひ、脇差つかひといはん事也。弓・鉄袍・鎧・長刀・皆是武家の道具なれば、いづれも兵法の道也。然れども、太刀よりして兵法といふ事、道理也。太刀の徳よりして世を納め、身を納むる事なれば、太刀は兵法のおこる所也。太刀の徳を得ては、一人して十人に勝つ事也。一人にして十人に勝つなれば、百人して千人にちち、千人にして万人に勝つ。然るによつて、わが一流の兵法に、一人も万人もおなじ事にして、武士の法を残らず兵法といふ所也。道におゐて、儒者・仏者・数寄者・しつけ者・乱舞者、此等の事は武士の道にはなし。其道にあらざるといふとも、道を広くすれば、物事に出であふ事也。いづれも人間におゐて、我道／＼をよくみがく事肝要也」とある。（原文）

まず、此道（兵法の道）において、太刀（刀）を習得し得た者を、兵法者と世に言い伝

えている。武芸の道に至りて、弓を能く射れば射手といひ、鉄袍を得たるものは鉄袍うちといひ、鎧をつかひ得ては鎧使いといひ、長刀をおぼへては長刀つかひといふ。ところが、太刀の道をおぼへたるものを太刀つかひ、脇差つかひとは言わない。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、いわゆる「弓、鉄袍、鎧、長刀」などは、確かに、みな武家の道具なれば、いづれも兵法の道ではあるが、しかし、それは、いわば「限定使用」（主に合戦使用）であり、ありとあらゆる場面で自由自在に使えるような武器ではないのである。一方、太刀（刀）というのは、ありとあらゆる場面で自由自在に使える武器であり、それゆえ、太刀よりして兵法といふ事、道理（尤もなこと）なのである。なぜなら、それは、「太刀」（刀）こそは、例えば、弓、鉄袍、鎧、長刀、その他、色々な「武器」のなかでも、最も有用な「武器」であり、いわば「武器の中の武器」（つまり最も機動性に優れた武器）であり、その「太刀の徳」（太刀の優れた力）をもって、世を納め、身を納むる事なれば、太刀は兵法のおこる所（根本）なのである。そして、「太刀の徳」（太刀の優れた力）を得ては、一人にして十人に勝つことができる。一人にして十人に勝つことができれば、百人にして千人に勝つこともでき、また、千人にして万人に勝つこともできる。然るによつて、「わが一流の兵法」（それは「宮本武蔵の兵法」）においては、一人も万人もおなじ事にして（つまり「宮本武蔵の兵法」は、一対一だけの兵法ではなく、万人対万人の兵法でもあるので）、それゆえ、武士の法を残らず兵法といふ所也。つまり、一対一の兵法であれば、太刀（刀）だけの兵法だけですむが、「宮本武蔵の兵法」というのは、万人対万人の兵法でもあるので、太刀（刀）をはじめ、弓、鎧、鉄袍、長刀、馬術、その他、それらすべてをひつくるめて、まさに「兵法」（「宮本武蔵の兵法」と呼ぶのである。つまり、宮本武蔵の言いたいことは、兵法の「主軸」は、まさに「太刀」（刀）であることは確かであるが、その他の「弓、鎧、鉄袍、長刀、馬術、その他」なども、みな武家の道具なれば、いづれも兵法の道として、それらもしっかりと学び得ておくべきことだと言っているのである。

また、道において、儒者、仏者、数寄者（茶人）、しつけ者、乱舞者、その他、これらの「道」は、確かに「武士の道」ではない。しかし、「武士の道」ではないといえども、これら様々な「道」を広く知れば、それだけ様々な「物事に出会う」（つまり様々な「物事を知ること」になるのである。そして、様々な「道」の様々な「物事を知れば知る」だけ、自分の「兵法の道」も、それだけ「豊かで奥深いもの」になるのである。だからこそ、宮本武蔵は、心得「九項目」のなかでも、様々な「諸芸にさわり、諸職の道を知る事」と強く説くのである。そして、どのような分野であれ、人間において、わが道わが道をよく磨くことこそは、何よりも「肝要」（最も「大事なこと」）であると言っているのである。

一、兵法に武器の利を知るといふ事

次は、「兵法に武器の利を知るといふ事」という項目であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……武道具の利をわきまゆるに、いづれの道具にても、おりにふれ、時にしたがひ、出合ふもの也。脇差は座のせびき所、敵の身ぎわへよりて其利おほし。太刀はいづれの所にも大形出合ひて利あり。長刀は戦場にては鎧におとる心あり。鎧は先手なり、長刀は後手也。同じ位のまなびにしては、鎧は少しつよし。鎧・長刀も、事によ

り、つまりたる所にては其利すくなし。取籠り者などにもしかるべからず。只戦場の道具なるべし。合戦の場にしては肝要の道具也。され共、座敷にての利をおぼへ、こまやかに思ひ、実の道を忘るゝにおゐては、出合ひがたかるべし。弓は合戦の場にて、かけひきにも出合ひ、鎧わき、其外物きわぐにて、はやく取合はするものなれば、野相の合戦などにとりわきよき物也。城せめなど、又敵相二十間をこへては不足なる物也。当世におゐては、弓は申すに及ばず、諸芸花多くして実すくなし。さやうの芸能は、肝要の時、役に立ちがたし。其利多し（誤字で「少し」）。城郭の内にしては鉄袍にしく事なし。野相などにては、合戦のはじまらぬうちには、其利多し。戦はじまりては不足なるべし。弓の一つの徳は、放つ矢、人の目に見えてよし。鉄袍の玉は目に見えざる所、不足也。此義能々吟味有るべき事。馬の事、つよくこたへてくせなき事肝要也。惣而武道具につけ、馬も大形にありき、刀・脇差も大形にされ、鎧・長刀も大かたにとをり、弓・鉄袍もつよく、そこねざるやうに有るべし。道具以下にも、かたわけてすぐ事あるべからず。あまりたる事はたらぬと同じ事也。人まねをせず共、我身に随ひ、武道具は手にあふやうにあるべし。将卒共に物にすぎ、物をきらふ事悪しし。工夫肝要也」とある。（原文）

*

*

さて、今度は「武器の利」を知るということであるが、それは、「……いづれの道具にても、おりにふれ、時にしたがひ、出合ふもの也」とある。つまり、いづれの道具も、その時、その状況に応じて、まさに「出合ふもの」（つまり「有効で役立つもの」）である。

例えば、「脇差」というのは、本来、「座のせばき所」、つまり、「太刀などの自由自在に使えないような）「狭い空間」の所で使うものであるが、特に「敵の身ぎわへよりて其利おほし」とある。つまり、「相手の身ぎわによりて」（それは「相手の身近かに寄った時」には、「脇差」というのは、その「利が多い」（つまり「極めて有効」）だと言っているのである。これは、数多くの「実践」から得た「生きた智慧」であり、それゆえ、道場などでは、腰の「脇差」の使い方などは、決して誰も教えてはくれないものである。

また、「太刀」（刀）は、「……いづれの所にも大形出合ひて利あり」とある。それは、「太刀」（刀）というのは、大方、いづどこでもどのように使っても必ず「利」（極めて有効なもの）であり、それゆえ、「太刀」（刀）こそは、いづどこでも自由自在に使える機動性の最も高い「武器」ではあるが、唯一、（太刀の自由自在に使えないような）「狭い空間」の所だけは、武器としての「欠点」をさらすことになる。それゆえ、その唯一の「欠点」を、まさに腰の「脇差」でおぎなうことによつてこそ、まさに「万全」となるのである。だからこそ、この「二刀の刀」を最大限に使いこなす、或いは、自由自在に使いこなして、あらゆる事態に対応でき得る、まさに勝つための「剣法」こそは、まさに宮本武蔵の「二天一流」という「剣法」（剣術）そのものになるのである。

次に、長刀は、戦場にては鎧に劣るところがあり、また、「……鎧は先手なり、長刀は後手也」とある。それは、「槍」というのは、本来、「先手」（最前）の道具であり、一方、「長刀」というのは、本来、「後手」（槍の後）の道具であり、そして、同じ位の「学び」（熟練度）同士の対戦であれば、槍と長刀では、槍の方が「少し有利」と見ているのである。また、鎧も長刀も、事（場所・状況）により、「つまりたる所」（自由自在に振り回せないような所）にては、その「利」（利点）は少ないとある。まして、「取籠り者」（部屋の中に閉じ籠っている者・籠城者）などを打つ場合は、（自由に振り回せない）鎧・長刀

などは（好んで）使うべきものではない。つまり、ただ「戦場の道具」として「利」（有効）であり、それは、「合戦の場」においてこそ、最も「肝要の道具」（最も有効な道具）となるのである。ところが、「座敷」（室内）でもうまく使いこなすことを覚え、細々とした使い方にとられ過ぎて、実の道（鎧・長刀の本来の使い方）などを忘れるようになっては、逆に、実践（合戦の時）には役に立たないことになってしまう。つまり、大事なことは、鎧には鎧の長所があり、長刀には長刀の長所がある。そのそれぞれの「長所」を生かした「使い方」をすべきであり、そして、例えば、「鎧の長所」であれば、それは、すなわち、まさに「合戦の場」でこそ、最も「有効な武器」となるのである。

また、「弓」は、合戦の場にて、その「かけひき」（軍勢の進退）にも「出合ひ」（使つて有効）であり、また、「鎧わき」（それは「遣隊の傍ら」）やその他の様々な「諸隊」の傍らで、まさに「連係（援護）攻撃」などを行なう時にも、素早く迅速に対応できるので、特に「野相の合戦」（つまり「野外の合戦」）などの時には、とりわけ「有効」なものである。一方、「城攻め」や「敵相」（敵との距離）が「二十間」（三十六尺）以上を超えると、むしろ「不足」（ほとんど役に立たないもの）である。当世（今日）においては、弓は申すまでもなく、諸芸花多くして実が少ない。そのような「芸能」（武芸）は、肝要（いざという）時には、役に立ちにくく、その「利」（利点）は、少ないのである。

一方、「鉄砲」であるが、それは、「……城郭の内にしては鉄砲にしく事なし」とある。つまり、城郭の内からの「鉄砲」に勝るものは何もないと、もう無条件で「鉄砲」の「利」（有利さ）をほめ讃えているのである。また、「野相」（野外の戦い）においても、まだ「合戦のはじまらぬうち」（それは「相手との距離がある」うち）は、その「利」（有利さ）は、非常に多くある。しかし、戦はじまりては（つまり「相手との距離がなくなつてしまう」と、まさに「不足」（ほとんど役に立たなくなつて）しまうものである。

また、弓の一つの「徳」（優れている点）は、まさに「……放つ矢、人の目に見えてよし。鉄砲の玉は、目に見えざる所、不足也。（これは、目に恐怖を与えないからか）。此義能々吟味有るべき事」とある。これは、一体、どういうことを意味しているのだろうか？

例えば、「弓」と「鉄砲」とを比較対照した場合、どちらが「武器」として優れているのだろうか？ まず、弓の「矢」というのは、まさに目にはつきりと見えている。それゆえ、「……的へと向かつていく姿ははつきりと見えていて、その結果もはつきりと見えている」ことになる。従つて、その「結果」を見て、次の「矢」を射る時には、その「結果」を踏まえて、まさに「微調整」（つまり「修正」）をして、次の「矢」を射ることができ得るのであり、それだけ今度は「的に当たる確率」もそれだけ高くなっていく。それに加えて、もう一つは、鉄砲に比べれば、「弓」は、すぐにも次の矢を射ることが出来るとともに、まさに「素早い行動」（それは「機動性に富んでいる」）ことにもなるのである。

一方、鉄砲の「玉」というのは、人の目にはまったく見えない。それゆえ、「……的へと向かつていく姿はまったく見えないが、しかし、その結果だけは見ることが出来る」というものである。しかも、当時の「鉄砲」（火縄銃）というものが、一体、どのくらいの「性能」を持っていたかによって、結論は、全く違って来るが、もし、的に当てられる確率が同じ位ならば、ふつう鉄砲の方が有利であり、一方、その当時の鉄砲よりも、弓の方が的に当てる確率がより高ければ、むしろ弓の方が有利ということになるのかも知れない。むしろ、武器としての「破壊力」という点では、鉄砲の方が遙かに優れているが、し

かし、弓の「矢」でも、その数が多くなればなるほど、また、その「先に毒でも塗って」おけば、その「致死率」を高めるということは、十分に可能なことになるのである。

そして、「弓」と「鉄砲」、どちらが怖いかと問われれば、それはもちろん、どちらも怖いものではあるが、それでも、やはり「鉄砲」の方が遙かに怖いと感じるのはなぜなのだろうか？ それは、まず、鉄砲の「弾丸」というものは、まさに目には全く見えないほどの速さであり、しかも、かなり遠い距離からでも狙われて発射されれば、ふつう、よけようがないものであり、しかも、その「破壊力」の大きさ、それは、死に至る確率が極めて高いからでもあり、そして、今日では、当時の「弓」やその他の「武器」などの姿は、ほとんど消えてしまい、唯一「鉄砲」だけが、まさに今日までその姿（火縄銃）を現代の「姿」（様々な銃器）へと変えて生き残っている「武器」ということになるのである。

さて、最後は、「……馬の事、つよくこたへてくせなき事肝要也。惣而武道具につけ、馬も大形おおかたにありき、刀・脇差も大形おおかたにきれ、鑓やり・長刀ながなたも大かたにとをり、弓・鉄砲もつよく、そこねざるやうに有るべし。道具以下にも、かたわけてすぐ事あるべからず。あまりたる事はたらぬと同じ事也。人まねをせず共とも、我身に随いひ、武道具は手にあふやうにあらべし。将卒しょうそつとも共に物にすぎ、物をきらふ事悪あしし。工夫くふう肝要也」とある。

まず、馬のことは、十分に応えて耐久力もあり癖のないのが肝要（大事）である。総じて、武道具（武器）については、馬も大形おおかた（それなり）に歩き、刀かたな・脇差も大形おおかた（それなり）に斬れ、鑓やり・長刀ながなたも大かた（それなり）にとをり、弓・鉄砲も丈夫で、壊れないようであるのがよい。これは、一体、どういう意味なのか？ なぜ、大形おおかた（それなり）でよいと考えるのか？ なぜ、「名馬」（より優れた馬）や「名刀」（より優れた刀）を追い求めてはいけないのか？ それは、馬は、まさに「馬の役割」（十分走れるという役割）を果たしてくれば、それで十分であり、また、刀は、まさに「刀の役割」（十分人が切れるという役割）を果たしてくれば、それでもう十分であり、それ以上の「走りや切れ味」などを執拗に追い求めるのは、それは、馬や刀に余りにも「固執・執着」し過ぎる（つまり「頼り過ぎて、いる」）からであり、大事なのは、馬が「名馬」（より優れた馬）であることではなく、その「馬」を自由自在に乗りこなせる「馬術」、こそが大事であり、また、刀が「名刀」（より優れた刀）であることが大事ではなく、その「刀」を自由自在に使いこなせる「兵法」（剣術）こそが、何よりも大事なことになるのである。

そして、道具以下（以外）においても、偏かたよって好すく（好む）ことあつてはならないとある。これは、一体、どういうことなのか？ まず、武器であるが、刀だけを偏愛する、鑓やりだけを偏愛する、弓だけを偏愛する、鉄砲だけを偏愛する、その他、そのような偏愛は、よくないので、太刀たち（刀）をはじめ、その他の「弓、鑓やり、鉄砲、長刀ながなた、馬術、その他」なども、みな武家の道具ぶけなれば、いづれも兵法の道として、それらもしっかりと学び得ておくべきことだと言っているのである。しかし、だからといって、それらすべて同じように鍛練すべきだというのではない。それは、「あまりたる事はたらぬと同じ事也」（つまり「多過ぎることは、逆に、どれも中途半端になり易い」）のである。また、他人が鉄砲を習つてから、自分も鉄砲を習おうというのではなく、大事なのは、自分にぴったりと合った「武器」を見つけ出し、そして、その「武器」が、自分の手にぴったりと合った「武器」（武器）になるまで、徹底的に鍛練すべきことなのである。つまり、太刀たち（刀）なら太刀たち（刀）を主軸として、その他の「弓、鑓やり、鉄砲、長刀ながなた、馬術、その他」なども、し

っかりと学び得ておくべきだということである。そのことは、道具以下（以外）でもすべて同じことである。そして、将卒共に「物にすぎ、物をきらふ事悪しし」とある。これは、一体、どのような意味合いになるのだろうか？ まず、今日の「軍隊」（将卒）に於いても、個人の「好き嫌い」など言えるような世界ではなく、また、個人の「好き嫌い」など言ってる場合でもないのである。それに加えて、何事においても、いわゆる「好き嫌い」はよくない」ということである。つまり、「これを好み、これを嫌う」、そのような偏った「好き嫌い」だけで物事を安易に「選び、判断し、決定し、そして、言動すること」では、決して物事を正しく「選び、判断し、決定し、そして、言動すること」など、到底でき得ないことになるからである。

一、兵法の拍子の事

次は、「兵法の拍子の事」という項目であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……物毎に付け、拍子是有る物なれども、とりわけ兵法の拍子、鍛錬なくしては及びがたき所也。世の中の拍子あらはれてある事、乱舞の道、伶人管弦の拍子など、是皆よくあふ所のろくなる拍子也。武芸の道にわたつて、弓を射、鉄砲を放ち、馬にのる事迄も、拍子・調子はある。諸芸・諸能に至りても、拍子をそむく事は有るべからず。又空なる事におもても拍子はある。武士の身の上にして、奉公に、身をしあぐる拍子、しさぐる拍子、管のあふ拍子、筈のちがふ拍子あり。或は商の道、分限になる拍子、分限にてもそのたゆる拍子、道々につけて拍子の相違有る事也。物毎のさかゆる拍子、おとろふる拍子、能々分別すべし。兵法の拍子におもて様々有る事也。先づあふ拍子をして、ちがふ拍子をおきまへ、大小・遅速の拍子の中にも、あたる拍子をしり、間の拍子をしり、背く拍子をしる事、兵法の専也。此そむく拍子わきまへ得ずしては、兵法たしかならざる事也。兵法の戦に、其敵の拍子をしり、敵のおもひよらざる拍子をもつて、空の拍子をしり、智恵の拍子より発して勝つ所也。いづれの巻にも、拍子の事を専ら書記す也。其書付の吟味をして、能々鍛錬有るべき物也」とある。（原文）

まず、「兵法の拍子」というのは、「……物毎に付け、拍子是有る物なれども、とりわけ兵法の拍子、鍛錬なくしては及びがたき所也」とある。つまり、何事につけても、拍子はあるものだが、とりわけ「兵法の拍子」というのは、鍛錬なくしては及びがたき所也（つまり「毎日毎日の鍛錬によつてのみ、初めて体得されるものであり、それゆえ、理屈などでどうなるものでもない」）のである。世の中にあらわれて（知られて）いる拍子には、例えば、能の舞、伶人（雅楽演奏者）管弦の拍子など、これらはみな「よくあふ所」（つまり調和する所）の「ろくなる拍子」（ゆがみ・ひずみのない正しい拍子）である。また、武芸の道においても、弓を射、鉄砲を放ち、馬に乗る事までも、拍子・調子はあるものである。諸芸・諸能においても、拍子に背くような事はあつてはならない。また、空なる事（姿形のない事柄）においても、拍子はあるものである。例えば、武士の身の上にしても、奉公（主君に仕えて）、身を上げる（出世、栄達する）拍子もあれば、し下げる（失脚、没落する）拍子もある。また、その「筈」（思惑通り）になる拍子もあれば、また、その「筈」（思惑通り）にならない拍子もある。或いは、商の道においても、分限（大金

持ちこ)になる拍子もあれば、分限(ふげん)〔大金持ち)であつても、そのたゆる(それを失う)拍子もある。つまり、それぞれの「道」において、それぞれ違う拍子がある。物事の栄える拍子もあれば、衰える拍子もある。よくよく「分別(ぶんべつ)」(わきまえる)べきことである。

そして、兵法の拍子においても様々あるが、「……先づあふ拍子をして、ちがふ拍子をわきまへ、大小・遅速の拍子の中にも、あたる拍子をしり、間の拍子をしり、背く拍子をしる事、兵法の専也。此そむく拍子わきまへ得ずしては、兵法たしかならざる事也。兵法の戦(たたかひ)に、其敵其敵の拍子をしり、敵のおもひよらざる拍子をもつて、空の拍子をしり、智恵の拍子より発して勝つ所也」とある。——つまり、まず、合う拍子を知り、ちがう拍子をわきまへ、大小・遅速の拍子の中にも、「あたる拍子」(当たる拍子)を知り、「間の拍子」(間合いの拍子)を知り、「背く拍子」(相手の拍子を崩す拍子)を知ることが、何よりも大事なことはあるが、特に、この「背く拍子」(相手の拍子を崩す拍子)を知り得ずしては、その「兵法」(剣術)は、(決して)確かなものとは言えないものである。そして、実践では、その敵その敵の拍子をよく知り、敵の思いも寄らない拍子をもって、その(敵の)「空の拍子」(自分にとって思いも寄らない拍子)を知り、それに対応して、(自分は)、智恵の拍子より発して、敵に勝つことができ得るということである。

例えば、相手が「自分の未だ知らない拍子」を以つて攻めてきた時に、相手には「こういう拍子(攻め方)もあるんだ」と知つて、それでは、その拍子(攻め方)にどう対応したらよいかをよく考えて、まさに「相手の拍子(攻め方)を崩す拍子」を以つて、それは、自分が長年実践で積み重ねてきた(兵法の)「智恵の拍子」より発して、敵に勝つことができ得るということである。——例えば、卓球などでも相手が自分の「全く知らない新しいサーブ」などをして来た時に、相手には「こういう拍子(サーブ)もあるんだ」と知つて、それでは、その「拍子」(サーブ)にどう対応したらよいかをよく考えて、まさに「相手の拍子(サーブ)を崩す拍子」を以つて、それは、自分が長年実践で積み重ねてきた(兵法の)「智恵の拍子」より発して、敵に勝つことができ得るということである。

ところで、最後の部分は、もう一つの表記があり、それは、「……敵のおもひよらざる拍子をもつて、空の拍子を智恵の拍子より発して勝つ所也」というものであるが、それは、「……敵にとつて思いも寄らない拍子」を以つて、その(自分の)『空の拍子』(敵にとつて思いも寄らない拍子)を、わが智恵の拍子より発して、敵に勝つことができ得る」というものである。

ちなみに、その敵その敵の拍子を知るとは、いわば敵の「呼吸」(息遣い)をはじめ、その時々の「……リズム、調子、間合い、タイミング、勢い、様子、気の長短、対応の仕方、(相手の)戦術、その他」の、まさに微妙なところまでも「感じ分ける」ということである。

一、心得「九項目」

さて、最後は、「地の巻」の後記であるが、それは、次のようなものである。つまり、

「……右一流の兵法の道、朝な／＼夕な／＼勤めおこなふによつて、おのづから広き心になつて、多分一分（意味は「大勢に対する兵法と一人に対する兵法」その両方）の兵法として、世に伝ふる所（世に伝わっている宮本武蔵の「二天一流の兵法」を）、初而書頭はす事、地水火風空、是五卷也。（自分の兵法を初めて書き頭わしたのが、まさに地水火風空のこの五巻）である。我兵法を学ばんと思ふ人は、道をおこなふ法あり。（この「法」とは、朝な夕な、毎日、兵法・剣術を学び、鍛練する時の、いわば「心得」《心の有様》というものである。）

第一に、よこしまになき事をおもふ所

第二に、道の鍛練する所

第三に、諸芸にさはる所

第四に、諸職の道を知る事

第五に、物事の損徳をわきまゆる事

第六に、諸事目利を仕覚ゆる事

第七に、目に見えぬ所をさとつてする事

第八に、わづかなる事にも気を付くる事

第九に、役にたゝぬ事をせざる事

大形如レ此理を心にかけて、兵法の道鍛練すべき也。此道に限りて、直なる所を広く見たてざれば、兵法の達者とは成りがたし。此法を学び得ては、一身にして二十三十の敵にもまくべき道にあらず。先づ氣に兵法をたえさず、直なる道を勤めては、手にて打勝ち、目に見る事も人にかち、又鍛練をもつて惣躰自由なれば、身にても人にかち、又此道に馴れたる心なれば、心をもつても人に勝ち、此所に至りては、いかにとして人にまくる道あらんや。又大きなる兵法にしては、善人を持つ事にかち、人数をつかふ事にかち、身をたゞしくおこなふ道にかち、国を治むる事にかち、民をやしなふ事にかち、世の例法をおこなふにかち、いづれの道におゐても、人にまけざる所をしりて、身をたすけ、名をたすく所、是兵法の道也。

正保二年五月十二日

寺尾孫之丞殿

新免武蔵

さて、宮本武蔵は、我が兵法を学ばんと思う人は、次の「九項目」を心にかけて、兵法の道を朝な夕な鍛練すべきと言っている。それは、①よこしまになき事を思ふ事。（つまり「正思・正考」正しく思い、正しく考えること）。②道の鍛練（「武芸の鍛練」）に励むこと。③諸芸にさわる（広く諸芸にふれること）。④諸職の道を知る（様々な職業の道を知ること）。⑤物毎の損徳（何が損んで何が徳か）をわきまゆる事。⑥諸事目利を仕覚ゆる事。（物事を見分ける眼を養うこと）。⑦目に見えぬ所をさとつて知る事。（あつそうかと物事の本質を捉えて知る事）。⑧わづかなる事にも気を付くる事。（些細な事柄にも心を配ること）。⑨役にたゝぬ事をせざる（しない）事。以上、九項目である。

そして、「……此道に限りて、直なる所を広く見たてざれば、兵法の達者とは成りがたし」とある。これは、極めて大事な「言葉」であり、まず、いわゆる「兵法の達者」（達

人)となるためには、次の「二つのこと」が大事になるのである。その一つは、真つ直ぐな(正しい)「兵法」を日々鍛錬して、それをしつかりと習得(体得)すること。そして、もう一つは、この世の実に様々な事物を見る時も、偏つた狭い見方などはやめて、広い視野から全体を正しくとらえて、物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを見極めるようにしなければ、誠の「兵法の達人」とはなり得ないのであり、それは、一体、どのような「意味合い」の言葉になるのかと問えば、それは、「風の巻」の中にもあるように、例えば、他流の「……長き刀、つよみの太刀、短き太刀、太刀かず多き、太刀の構え、跳んだり、はやきを用いる、その他」などは、いかにも「有効なもの」のように思いなしで、それらに余りにも、「固執・執着」し過ぎている他流の「兵法」というのは、決して真つ直ぐな(正しい)「兵法」などとは言えず、それゆえ、そのような偏つた「兵法」ではなく、まさに真つ直ぐな(正しい)「兵法」を日々鍛錬して、それをしつかりと身につけ(体得)し、そして、ものの「見方」なども、偏つた狭い見方などはやめて、広い視野から物事を正しく見極めることこそ、何よりも大事なことになるのである。

そして、この法(兵法)を学び得ては、「……一身にして二十三十の敵にもまくべき道にあらず」とある。つまり、「……一人で二十人三十人の敵にも負けない」と言っているのである。それは、「……先づ氣に兵法をたえさず、直なる道を勤めては、手にて打勝ち、目に見る事も人にかち、又鍛錬をもつて惣躰自由なれば、身にても人にかち、又此道に馴れたる心なれば、心をもつても人に勝ち、此所に至りては、いかにとして人にまくる道あらんや」とある。——それは、まず、気持ちの上で、兵法を究めようという氣力を絶やさず、真つ直ぐな(正しい)兵法を日々鍛錬すれば、「手」(それは「剣術」)において人に打勝ち、また、「目に見る事」(それは「物事の見極め」)においても人に勝ち、そして、身体は、日々の鍛錬によって、まさに「柔軟さと強靱さと自在さ」とを兼ね備えて、「身」(その身体能力)においても人に勝ち、さらに、この「道」(兵法)を深く修練した「心」であれば、その「心」を以ても人に勝ち、そのような鍛え抜かれた「手・目・身・心」を以てすれば、どうして人に負けるなどということがあり得るだろうか。

しかも、もつと「大きな兵法」(合戦)においては、「……善人を持つ事にかち、人数をつかふ事にかち、身をたゞしくおこなふ道にかち、国を治むる事にかち、民をやしなふ事にかち、世の例法をおこなふにかち、いづれの道におゐても、人にまげざる所をしりて、身をたすけ、名をたすくる所、是兵法の道也……」とある。つまり、この「兵法」を真に「学び得て」は、わが身を助け、わが名を助けることができ得るようになるのはもとより、ほかのことにおいても負けるようなことはないと言っているのである。——これは、ただ単に「剣術」が上達したという領域を遙かに超越している。つまり、宮本武蔵という人は、若い時からの凄まじいまでの「武芸の修行」を何十年と続けた、その結果として、ただ単に「剣術」が上達しただけではなく、それに加えて、人間としての総合的な「内的成長(成熟)」をも同時に遂げていたということである。それは、一体、なぜなのかと敢えて問えば、それは、宮本武蔵の言う「兵法」(或いは「兵法の智慧」というのは、ただ単に「剣術」だけに限つたものではなく、他の「武芸」(例えば「弓、鎗、鉄砲、長刀、馬術、その他」、また、様々な「学問」(六芸「礼楽射御書数」)や「小芸」(例えば「連歌、茶、書画、細工《彫刻》、その他」)など、様々な「諸芸・諸職」などに実際に携わって得た様々な「知識」などをも含めた、まさに総合的な「智慧」であるからである。つまり、宮本

武蔵という人は、ただ単に「剣術」だけに特化した人ではなかったのである。——以上で
「地之巻」は、終わりにしたいと思う。
*
*

あとがき

あとがき

本を読む

本を読むとは、表面的な「意味や内容」などをあれこれ追うことではない。本を読むとは、最終的には、作者の「心を読む」ことである。そして、作者の「心を読む」とは、すなわち、作者の「心の「つぶや」を聴くことである。そして、作者の「心の「つぶや」を聴くとは、すなわち、作者の「心の声をそのまま（生のまま）聴く」ということである。そして、作者の「心の声をそのまま聴く」ためには、まず最初に、われわれ人間は、この世に生まれて、今日まで生きてきた「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などから、自ずとその人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが生じることになるが、しかし、それらは、その人の「色メガネ」に過ぎず、それゆえ、その「色メガネ」を一度取り外すことによってこそ、初めて、百%純粋な「眼」で「対象」そのものが見えて来るということである。

さて、自分の「心」をいわば「真っ白な状態」にしてから、いよいよ「本文」（原文）の「一字一句」を、それこそ、どこまでもゆつくりと、その「一字一句」を深く深く噛みしめるように深く読みくだきながら、何度でもゆつくりと一字一句を、どこまでも深く深く厳密に読み解いていくことである。そうすれば、自然と作者の「魂の鼓動」（その息づかい）というものが、そのままそっくり（生のまま）聴えて来るということであり、それは、すなわち、すでに「正保二年（一六四五年）に死んでいるはずの「劍豪・宮本武蔵」という人物の、まさに「魂の鼓動」（その魂の生の声）を、そのままそっくり（生のまま）聴くことが、初めて、「可能」になるということである。

②「水之卷」へと続く……。

平成三十一年四月吉日（決定版）

如月翔悟

「参考文献」

- ※底本「五輪書」(渡辺一郎校注)(「岩波文庫」)
- ※底本「五輪書」(佐藤正英校注)(「ちくま学芸文庫」)
- ※底本「五輪書」(兼田茂雄校注)(「講談社学術文庫」)
- ※底本「武蔵の五輪書を読む」(ウエブ参照)